

【朝会で子どもたちに伝えたこと】

青木和雄さん著書「ハッピーバースデー」では、様々なことが原因で悩み苦しむ孫の女の子を祖父母が優しく見守り、そしてときに無理のない声かけをしていく様子がえがかれています。その部分を何度も何度も読み返したくなります。

- ①「怒るときは、思い切り怒れ。悲しいときは思い切りなげ。がまんなんかするな。感情を殺すことは生きるエネルギーをなくすことだよ。じいちゃんがしっかりうけとめてやるから、安心して本当の自分を出してごらん。」

これを7月と8月の2回の朝会で子どもたちに話しました。そんなじいちゃんのような存在になりたいと思いつつながら。

また、次の文は私も常々思い願っていることの一つです。子どもたちには少しでも強い人間になってほしいと思います。強い人というのは、“いざというときにふんばりのきく人” “人を受け入れる力を持っている人”でしょう。まさに②にあることがその全てを表していると思います。

- ②「心がかわいていては、人間ちゃんと生きられん。心には、余分なほどにいろんなものを入れておいた方がいい。そうでないと、いざというときにふんばりのきかない心の弱い人間になってしまう。」

小学生のうちに身に着けたい力は、単に教科学習の内容を理解することだけではありません。自分の好きなことを見つけ、それに十分な時間を費やして自分の力にしていくこと、そこから湧き出してくる疑問や課題を解決するための努力ができる力です。

小学生時代にこのような生活を送ることができた子どもたちの数年後の様子はまさに私たちの願いを遥かに超えた素晴らしいものとなっていることが卒業生の姿から分かります。

今、目の前にいる子どもたち一人ひとりのために、私たちは何をしなければならなのでしょう。また、何をしてはいけないのでしょうか。これを考え、そして実践していきます。

【6年生 特別授業】

6年生の児童を対象に、インターネットの安全・安心利用のための出前講座を行いました。スマホ所持者の割合は小学校高学年になると大分多くなるようですが、インターネット利用はスマホ以外でも、携帯電話、ゲーム機などをその端末として利用できるようになってきていることは皆さんご存知のことと思います。特に、ネットワーク環境を利用した複数の子どもたちで行うゲーム、そしてチャットなどを使った交流では、使用に関するルール作りがなされない(守られないことも含んで)ままだに端末が与えられると、その危険性などが分かる前に楽しさだけを感じてしまい、後にそれが悩みの原因になってしまうことも多いようです。

出前授業でも紹介されていたのですが、子ども同士の会話の中で、「かわいくない」というものは、発音しだいで「かわいいね」という意味にもとれるそうですが、これを文字で表すと、「かわいい」を否定する意味にとられることが多いのは少し考えれば容易に理解できます。

ゲームをしているときに、決められた時間が過ぎていることを母親に注意され、母親への気持ちを「じゃまが入って、ゲームが失敗。本当にうざい！」と書き込んでみたところ、相手は自分に対してその書き込みがされたと思い込み、書き込んだ相手に対する怒りを他の友だちに伝え、結果仲間外れにしてしまいます。書き手側がまるで考えていない方向に話が進み、自分が仲間外れにされる理由も分からない。さて、この段階ですでに「いじめ」なのでしょう。

このように書き込んだコメントや投稿した写真などは簡単に削除できるものではなく、逆にインターネットの世界ではごく短時間のうちに多くの人に伝えられてしまいます。子どもたちには、日常の会話とネットへの書き込みの違いを学ぶとともに、普段から言葉を選び、自分の気持ちをしっかりと伝えることの大切さを教えていかなければなりません。

もう一つ心配なのはネット依存の問題です(前号でもふれました)。9月1日の新聞報道で、スマートフォンのゲームやSNSなどインターネットの使い過ぎで日常生活に支障をきたす「ネット依存」の疑いが強い中高生が全国で推計93万人(この人数は中高生の七分の一ほどにあたります)いるとありました。5年前と比べると40万人増えているとのことでした。また、ゲームのやり過ぎで日常生活が送れなくなる「ゲーム障害」は今では精神疾患と認められているそうです。

「ネット依存」に関してある男子児童が「ネット依存の治療はどのようにするのですか？」と質問していました。「スマートフォンなどがなくても楽しい生活が送れるようにすることが治療です。」との答えはとても分かりやすいものだと思います。子どもだけでなく大人もそうですが、すでにスマートフォン等が生活に欠かせないものとなっているであろう今だからこそ上手に使っていく術を身につけなければならないでしょう。

【子どもたちの持ち物】

最近、ニュースでもしばしば取り上げられるランドセルの重さについて、私たちも関心を持って様子を見ているところです。子どもたちには、家で使うものだけを持ち帰るようにさせているのでそれほど負担にはなっていないと思いますが、それでもときどきあれもこれもランドセルや鞆に入れている子どもがいます。また、毎日の持ち物は弁当や水筒もあり、ときには放課後の習い事の道具を別の鞆に入れて持って来る子もいます。子どもたちの身体への負担がかかりすぎることはないように気を付けていきましょう。